上新田　雷電神社太々神楽

神楽殿建設記念　太々神楽の碑

8.天之岩戸の舞

神楽は古代より五穀豊穣家内安全を祈願する神祇儀式として、神社に奉納されてきた。古事記によると「天の岩戸」の前で踊った「天女命（あめのうずめのみこと）」が始祖で代々その子孫が朝廷の神事を司ってきたようだ。中世では神職が携わってきたが、江戸時代になると貨幣経済の発達や交通手段の改善により、伊勢参り出雲詣で人の往来が盛んになり、古典的な神楽に娯楽的な「興舞」が流入して「里神楽」が普及し、庶民文化として定着してきた。

総社神社の神楽は元治元年（一八六四）に京都から下賜されたのだという。上新田町の神楽はその系列に属し、明治二十年頃（一八八七）、総社神社の影響を受けた有志数人によって始められたうだ。それにしても神楽殿を初め、舞、囃子、太鼓、衣装等物的素を整えるのは容易ではなかったものと、今更ながら敬服する次である。

昭和八年（一九三三）一月四日未明、浮浪者の不審火によって焼したが、氏子達は近隣縁者の援助を頼って東奔西走し、同年秋れを再建することができた。当時神社は祭政一致の国家指導によって崇敬され、神楽も亦全盛時代を謳歌したものだった。

やがて昭和二十年（一九四五）終戦になると、神社は軍国主義象徴だと連合軍の占領政策によって冷遇されたが、神楽は芸能文財として生き残ることができた。その後昭和二三年（一九四八）は台風の被害で境内の一部が利根川に崩落したため、神楽殿を西曳き大修理をして現在まで使用してきた。しかしながら時代の趨で神楽に対する関心は年々衰退し、昭和三七年（一九六二）遂に存会員の減少で神楽の奉納ができなくなる危機を迎えてしまったそこで自治会、神社総代、神楽保存会の幹部協議した結果、数人の°保勢へに化の　っこ全　第要よーも　ー や戸廷た

新規加入者を得て存続することができた。

その後も後継者の養成に努力してきたが、昭和五三年（一九七八）時の利根川勝男会長は後継者を養成するには練習場所の確保が必要だとして神楽保存会の控所を建設したのである。以来昭和五七年（一九八二）から七年間、倉賀野神社の要請を受けて神楽を伝授し、平成二年（一九九〇）から現在迄は玉村町の火雷神社の要望により神楽を奉納してきた。この間、東地区文化祭を初め、前橋祭り経済連農業祭り、前橋郷土芸能連絡協議会スポレク群馬九六全国大会には神楽部門で県下二団体の一つに抜擢されて出場し名声を高めた。

爾来奉賛会としては神楽殿の老朽化を憂慮し、その改修のための余裕金を積立てるほか、納税組合の寄付金等で資金の醸成を図ってきたが、今回自転車道の境内通過による補償金の一部をもとにして近隣にない立派な神楽殿施設ができたのである。

上新田の人は神楽が好きだ。神楽を始めて百二十年、神楽を愛した心意気はあの激しかった戦争中一度も休むことはなかった。笛や太鼓の音に誘われて満開の桜の下で迎える春祭りの風情は、これから幾百年の歴史を刻んでいくことでしょう。

平成十四年四月吉日

〈　太々神楽の碑文を転載　〉

雷電神社太々神楽の舞座

1.大箒之舞　2.神招之舞　3.伊佐奈岐伊佐奈美之舞　4.荒神舞
5.剣之舞　6.扇子皇子之舞　7.猿田彦命の舞　8.天之岩戸の舞
9.塩撒之舞　10.白狐と百耕之舞　11.鞨鼓之舞　12.一本刀之舞
13.巫女之舞　14.片鉾之舞　15.八幡之舞　16.両刀之舞　17.扇之舞
18.国堅之舞　19.鍛冶屋之舞　20.八岐大蛇の舞

3.伊佐奈岐伊佐奈美之舞

7.猿田彦命の舞

写真提供　東カメラ愛好会

【東の今昔】

東の農村生活　①

東小学校の庭と新校舎

学校開設の当時は、従来は学問しなくてもよかったのに、今度は学校へ行かなくてはならないことになり、特に村の役人の方々はなかなか就学者の勧誘に骨を折り、中でも女子には手を焼いたらしい。

私が入学したのは大正七年四月八日、その頃は義務教育制度が徹底し不就学の問題は全然無かった。

校庭は現公民館（前の公民館）の南庭と東小プール一帯のところで、殆ど真四角に近かった。庭のまわりに棚は無く南と西は篠藪、東は滝川である。運動会をする時はトラックを画く。すると、まるでまん丸で周囲には観客席も作ったものだから、今考えて見るとおかしくなるような気がする。このトラックでまるで高麗鼠（こまねずみ）のように走りまわったと思うと吹き出しそうになる感じだ。庭の東には川棚があった。その北に小太い木が滝川の上にのり出して横倒しのように生えていたんだが、これが夏になると子どもたちのよい飛び込み台になった。

この庭から滝川を越える橋があり、東校庭に通じていた。これが割合に高さがあり中程が盛り上っていたので「たいこ橋」と呼んでいた。やはりここが夏は男生徒のまことによい飛び込み台となっていた。飛び込みのことを「しょうびんをかく」という。物凄い音と水しぶきを上げて飛び込むことは男性的であり男生徒の得意満面の姿が目に浮んで来る。

東校舎の東へ八教室が増設されたのが大正九年だったから私が三年生の時だった。

この校舎は東村が貧乏村だったので新築出来ず、前橋の敷島小？とかの古校舎を購入して再建したらしい。外側は赤く紅がらでも塗ったのだろう。然も北側に「つっかい棒」が数本つっかってあった。その為他校の子ども達に「東の学校はぼろ学校、つっかい棒が十三本。」と悪口を言われ、砂をかむような嫌な思いを味わった。

故　牛込　亘さんの『東の農村生活』から引用